（書式２）

＜事務局使用欄＞受付番号：　　－

「２０２２年度タイ・チュラーロンコーン大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学教育学部３年　香川楓子

私にとって、今回のプログラムを経て最も変わったのは、海外渡航・国際交流への抵抗感がなくなったという点である。私は、今まで、海外経験が家族旅行程度しかなかった上、常に英語の成績が悪く、苦手意識が強かった。そのため、日本語が通じない世界に行くこと、日本語が通じない方々と交流することの具体的なイメージがつかず、不安感が強かった。しかし、今回のプログラムにより、新しい環境にどう適応するか、日本語圏以外でどのようにコミュニケーションを取るべきか、についてのイメージを掴むことができた。勿論、二週間の渡航では、英語・タイ語の実力が十分についたとは言い難い。更に言えば、今回うまくいったのは、海外経験の豊富な日本人学生と一緒に渡航でき、チュラーロンコーン大学の先生方が、右も左もわからない日本人学生のレベルに合った時間割を作成してくださり、親身にサポートしてくれる現地の日本語専攻の学生たちに出会えたから、と外部要因によるところが大きい。しかし、必要以上に怯えて自分の可能性を狭めること、英語を話せる人を別世界の人のように感じることはなくなった。

また、今回のプログラムにより、様々な新たな出会いにも恵まれた。プログラムに参加していた京都大学の学生たちは、皆プログラムへの意欲が高いという点を除けば、学部・学年もばらばらで、部活動に励む者からサークルでリーダーシップを発揮する者、ビジネススキルを磨く者まで多様なメンバーであった。通常は交わることのない学生たちと、協力し合い、議論し合いながらタイで生活できたことは、貴重な経験であった。一口にタイへの関心と言っても、理系・文系では目の付け所が異なる。更に、それぞれの人生経験によって、タイ・バンコクの中でどこに惹かれるか、同じ観光地を訪れるとしても、どのように感じ、何にどれくらいの時間を割くのか、が全く異なるのが興味深かった。また、日本語を勉強しているタイの学生と交流することもでき、そちらも学びに繋がった。まず、不慣れな日本語会話をしようと頑張ってくれる学生たちとの関わりの中で、自分が母国語以外で誰かに話しかけるときの姿勢を顧みることができた。また、タイの学生との会話の中で、小さなカルチャーショックを受けたり、逆に思わぬ共通点を見つけたりする場面が多々あった。日常生活の中で問題意識を発見することで、新たな研究に繋がることもある。信頼感を持って生産的な会話ができる異国の友人ができたことは、私にとって大きな財産である。

進路への影響に関して言えば、上記のように、海外への抵抗感が薄らいだことで、以前よりも広い視野で進路を検討できるようになった。例えば、私は大学院に進学する予定だが、その際に、海外留学は英語力・生活能力の面から諦め、可能性を最初から除外していた。しかし、もう一度その可能性を検討し直してもいいのでは、と感じている。容易な道でないことは間違いないが、実力がないことを言い訳に尻ごむよりも、思い切って新天地に飛び込むほうが有意義なのではないかと感じた。